
僕自身として

田中 遼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕自身として

【Nコード】
N2813R

【作者名】
田中 遼

【あらすじ】
人間として、この時代に生きている者として、この国に生まれた者として、そして何より、僕自身として。シリアスな詩集です。

偽善的傍観者（前書き）

詩集です。

「シリアス」とはいえ、あまり重くはなりません。

読んでくださった方が、夜明けの気配を感じたり、突然に道標を見つけたら、といったことが起きてくれたら嬉しいです。笑

感想をいただけると作者が上記の気分になりますので、どうぞよろしくお願いします。笑

田中 遼

偽善的傍観者

聞いてるよ

悲鳴も

嘆きも

銃声も

見ているよ

悲劇も

苦痛も

爆発も

全てが

画面の向こうで

いつも起きてることなのさ

冷めた目でいられる理由は

ただ一つ

僕には関係ないことだから

「違う」「って？

何が違うんだよ

わざとらしい涙ほど

醜いものはないのに

善も偽善も

口に出すのは

簡単なんだ

ただ それだけだから

「それじゃダメなんだ」って

歌う奴もいるけど

派手な身振りをいれて

苦しげな顔を作った

彼女は ただ

自分を見てほしいだけ

まあ仕方のないことなんだけど

偽善じゃない善なんて

ありはしない

所詮誰でも

自分が一番

大事なんだから

でも 嘲笑うだけの傍観者より

嘘を纏った偽善者の方が

ずっと ずっと

何かを変えようとしてる

拳に拳を返しても

世界は変わらないけど

だからって

ナイフを返してどうするんだ

誰もいない

何もいない場所に

世界を変えて

それを進歩と

ほざく気が

本当に強いのは

自分を抑えることが出来る人

戦わないで闘う人

でも弱いわけじゃない

振り上げた拳を

静かに下ろす

そんな

特別な強さと

手を握り締めもしない

紛れも無い弱さが

同じとでも

思っているのか

いつからか

僕達は

誇りをひがみに

変えてしまった

誰かが

必死で守った

この国を

壊すことなく

燃やすことなく

腐らせてしまったんだ

これじゃダメだって

僕は呟いてみせるけど

誰にも聞こえないように

でも誰かに聞いてほしくて

小さく小さく

呟くだけ

「日本人として」、「そして何より「自分自身として」といったところでしょうか。

書き出しから二転、三転して、その後部分部分を入れ替え、加筆し、こういう形で完成させた結果、何かギクシャクした感じになってしまいました。

私はこの国には「誇るべきもの」がたくさんあると思っています。

でもだからこそ、今の日本は好きになれない。

自らの全てを否定するような風潮に終わりは来るのでしょうか。

卒業

三年前のあの日

僕はあの場所を

卒業した

見つけようとして

諦めて

戦おうとして

諦めて

残そうとして

諦めた

そんな場所

花びらの舞う卒業式

でも涙は出なかった

「さよなら」も

「またね」も

「卒業」も

同じ意味だと

思っていたから

僕らは笑いながら

大きく手を振った

「バイバイ また会おう」

約束もせずに

また会えるなんて

僕達は

「人生」の

書き易さに

騙されていたんだ

二年前のある日

僕はあの頃を

卒業しようとした

ただ楽しくて

笑って

悲しくたって

笑って

そんな自分も

笑ってた

そんな頃

花びらの舞う遊歩道

なんでもない

ただの「今日」

思ったよりも

遠い遠いあの頃

泣かないことが

強さだったあの頃

今の一年を

引き替えに

一日だけ

帰れたらなんて

そんなものを

僕は捨てようとしたのさ

僕達は

「思い出」の

軽い響きを

信じ込んでいたんだ

一年前のこの日

君はこの場所を

卒業していった

愛されるために

走って

愛そうとして

走って

生きるといつことを

走った

そんな君

花びらの舞うこの季節

君だけの卒業式

「さよなら」と

花びらを吹き上げて

空を見ているんだ

泣いてなんかいないさ

本当だって

ただ光が

目に染みただけ

約束は破ってないよ

嘘じゃない

ホントだよ……

僕達は

「運命」の

重い響きを

笑っていたのに

そして僕はただ

約束を抱いて

ここに
いる

そう君を憎んだ

この世界で

君が愛した

この世界で

僕は生きなきゃならない

「人生」

「思い出」

「運命」

そして「さよなら」

その重さを知った僕は

時に泣きながら

時に笑いながら

今日この時を

生きていく

「卒業」の

その日まで

その時まで

僕はここにいる

最近「源氏物語」（恥ずかしながら現代語訳版ですが笑）を読みはじめました。

そして感じたのが、「察しろよ」と言わんばかりの、ぼかしてぼかして書いた文章の魅力であったり、「何かになぞらえる」という表現の巧みさであったりします。

近頃は「それを取り入れることが出来たらなあ」、なんてことを頭の隅に引っ掛けながらこういう詩を書いています。笑

からげんきでも

「おぼい」でもい

からげんきでも

「おぼい」でもい

しそでも

からげんきでも

ないて

ないて

ないたから

きつと それでも

ちからが

ゆうきが

わいてくるから

そして まじひやうし

だいじなこともある

そこにいる だれかが

ないている だれかが

がんばって わらう

きみをみて

もうひとつ

げんきが

えがおが

うまれてくるんだ

ひかりをうけて

きが

そだつみたい

うそから

ホントを

つくるんだ

つくれるんだ

うそじゃないよ

だから

わらってよ

そしたら きっと

きみも

だれかから

うそでも

「おしばい」「でもない

ホントの

えがおを

うけとって

きづけば

ホントに

たのしくなってるはずなのさ

だから

わらってよ

適切なコメントが思い浮かびません。

被災者の方々の安全、必要とされているものがすぐに届けられること、それに被災地の一日も早い復興をお祈りしております。

でも、空元気でも、（決して「笑顔を作る」のではなく）「笑おうとする」と。

これが必要なのは今現在、まだ日常を保っている人にも言えると思います。

がんばらうっ、ニッポン！

「ピリオド」

二人の時間が終わった日

僕らの目に

涙はなかった

景色を風化させるより

壊してしまったほうが

きっと楽だから

「愛」や「恋」

二人はもうそれほど

分かりやすくもない

でも 「友情」といつと

何かが違う

他の誰でもなく

二人で打った

「ピリオド」

痛みも傷も

軽いものではないけれど

きっと正しい

結末なんだろうござ

少し残った未練にさわり

君は微かに微笑んだ

「切ないね」と笑った

その顔は

僕の好きだった

君のまま

戻りたい「あの頃」から

僕らは変わっていないけど

変わらずにあることが

二人を変えてしまったんだ

終わりではない

始まりもしない

ケリをつけ損ねた二人

好きなのに

好きだから

「バイバイ」

でも

どうしても

言えなかったことがある

他の誰でもなく

二人が望んだ

「ピリオド」

正しいことは

分かっていた

分かっていたのに

ただ 君が好きだった

そんな理由で

僕が迷って

「コンマ」になった

前作「楽譜のない歌たち」を見て下さっていた方には「またか」と言われるかもしれない作品、「ピリオド」です。笑

結局、修正した作品は全部こっちに載せることにしました。

タイトルが「」で囲まれている作品は、修正前が「楽譜のない歌たち」に載っています。

「見たい」と思われた方はご自由に。

ちなみにこっちが「改善版」なのか「改悪版」なのかは、皆様の判断にお任せします。笑

銀色の指輪

部屋の整理を始めてすぐ

眠っていた思い出と出会った

僕は手を止めて

それを拾い上げた

露店で買った

おもちゃの指輪

ふざけて 薬指に はめてみた

ピッタリ過ぎて

外せなくなった僕

「運命なんだ」なんて

笑ってみせた君

そんな昔の物語

例えば

思い出に重さがあるとして

あの時の二人は

どんな軽さで

片付いてしまふのかなあ？

血が出てる膝よりも

ささくれた指が

痛い時だつてある

おもむろに指にはめてみる

想い出のシルバーリング

小指の先までしか入らない

小さな指輪

「運命」なんて

そんなもんなんだけど

それでも 今

何かをこらえる僕もいる

そんな寂しい物語

例えば

運命に強さがあるとして

僕が立ち向かったのは

どれ位のやつなのかなあ？

結局負けたのだから

知っても意味はないけれど

指輪をなくした君は

ホントに悲しそうに泣いてたね

でも君の指からすり落ちた

あのリングは

僕の背伸びと

君の優しさを

知っていた

君に囁いた

あの想いは

ホンモノだけど

だからこそ多分

二人は

あんなに傷ついたんだ

例えば

「愛してる」に点数スコアがつくとして

僕の想いは

どれだけの評価に

終わるのかなあ？

この指輪だって

僕にしか分からないものなのに

例えば

想い出に重さがあるとして

あの時の二人は

どんな軽さで

片付いてしまっのかなあ？

知ったところで

認めはしないんだろうけど

例えば

この指輪に価値があるとして

一体誰のために

それを表すつもりなのかなあ？

僕はとっくに

それを知っていたのに

でも同時に

これはもう必要ない

物語は

幕を下ろしたんだ

でも僕は

縮んだ指輪を

大事に 大事にしまい込む

剥げかけた銀メッキも

まだ 輝いている

「暗黒物質」ってものがあります。

まあ目に見えないけれど質量が存在する、そんな物質らしいです。

それがどんな物質であるかを解明するのが、昨今の学者たちの課題となっっているそうで……。

多少そういう系統の本を読んで、何の根拠もなく思ったのが「空間そのものに質量があるんじゃないか」とまあ、下手なSFばりの

説明だったわけですよ。

そしてそこから浮かんだ、「思い出の重さ」というフレーズを入れたのがために筋を考え、書き上げました。

「くかなあ？」という問いかけの響きが気に入っていた頃の作品ですよ。笑

A p l a c e r

目を掠めた

君の名に

急いで振り向いて

みたけれど

自分でももう

気付いてた

駅の広告に

君の名が

あるはずもない

案の定

その学校は

君の名前を

たった一文字

真似していただけだった

こんなところで

君が出てくるなんて

よせ やめてくれ

僕は忘れなきやならないんだ

ほんの一瞬

頭をかすめた

夢だったのに

目が覚めても

忘れられないのは

どうしてだ

手の中から

すり落ちる

砂のように

時も

思い出も

流れていく

その瞬間は

心地良いのに

手にこびりついた

砂粒は

忌まわしく

感じてしまっんだ

目を掠めた

君の背中

でもここは

君の街じゃない

目で追ったのも

ただの反射で

期待なんて

ほんの少ししかしてない

言うまでもなく

そこに君が

いるはずもなかった

あんな微かな気配に

惑わされるなんて

よせ やめてくれ

僕は忘れなきゃならないんだ

ほんのわずかな

可能性に

必死で縋り付いて

ドラマの主人公でも

演じてるつもりなのか

苛立ちのままに

空に放った砂粒達

すぐに後悔して

それを再び拾いあげようなんて

まさか本気じゃないだろうな

どうすれば

そんなことを信じられるんだ

草むらに飛び込んだボールが

見つからず

泣いたことだってあったのに

どんなに特別な意味をつけようと

砂は砂でしかない

そうあれも

ただの砂粒だった

ただ 何か

何か

輝いていた

それだけのこと

「A p l a c e r」とは砂金収集所のことらしいです。

内容は……

まあ、察してください。笑

僕らは変わった

「なにが」と問われても

僕らは答えられない

「どこが」と考えても

僕らにも分からない

「いつだ」と訊かれたら

「あの時」とだけ言えばいい

僕らは

同じときに

同じものを

味わった

生きること

死ぬことさえも

揺るがされた

あの時

それ以前の僕らとは

絶対に違う

僕ら

でも

何が違うのか

それは分からない

変わってしまった風景を

記憶と比べる

まちがいさがし

「何か違う」「というだけのこと

目に見えない場所

言葉に出来ない部分で

僕は

僕らを

見つめなおしている

命なんて儂いものなのだけど

少なくとも死ぬまでは

僕らのものであるはずだから

生きることも

死ぬことも

遠くにはなくて

今ここに

まさにここに

この場所にあることを

分かった気でいた僕らは

あの時

初めて

それを知った

あの時

僕らは

地面のきしむ

あの恐怖の音を

感じながら

そんな真実を

つきつけられていたんだ

僕らは変わったけれど

それ以外は何も

分からないままにいる

確かに変わりました。

それはふとした一瞬に頭を過ぎる考えであったり、反射的に口にする言葉であったりします。

しかし、それが何であるのかはよく分からない。

「何か」「変わってしまったのです。」

シンデレラ

「時間だ」なんて

君が立ち上がる前から

分かっていた

何度見たことだろう

いつも君は

この瞬間に

それを言う

ここは舞踏会ではなくて

僕は王子様であるはずもない

でも君は

シンデレラのつもりなのか

12時の鐘が響いたら

魔法が解けてしまうのか

シンデレラは

これが魔法と呟いた

この絶妙な距離感

熱すぎず

冷たいということもない

奇跡みたいに

バツチリはまったピース

動かすのが怖いって

そんな呪いを

自分にかけて

君は僕の元を去って行く

帰り道がある内に

いつもの時間

君が出て行く

別れの言葉も

そこそこに

明日があるし

時間はない

いつもギリギリなんだって

君が笑う

けど

君はわざと

綱を渡るうとしてる

最後の力ボチャの

馬車に滑り込んだ君は

ホッとするのかどうなのか

「今までのベスト」が

君を

僕を

臆病にしてしまった

僕達は運命の歯車が

回りはじめるのを

ただ

期待して待っている

「シンデレラは

何も落とさず

帰って行きました」なんて

皮肉な言葉を

送ってみた

意味なんて

分からなくていい

ただ言わずには

いられなかっただけ

でもその時

君の忘れた

「ガラスの靴」が

震え出したんだ

そして馬車を逃した

シンデレラ

彼女は

魔法で出来た

盾も

仮面も

取り去って

「靴」のために「

戻ってきた

いろいろなぞらえて書いてみました。

案外良い出来何じゃないかと思っています。

空の鳥かご

窓際に

ひどく悲しい 場所がある

それは からっぽで 虚ろな

一つの鳥かご

かつてそこに

小鳥が一羽

逃げたのか

放してしまったのか

それとも 死んでしまったのだろうか

もつけない 小鳥の住処

それでも今

かこの扉は開けてある

行方も知らぬ

美しい鳥

戻るはずもない

その歌声

目を閉じるだけで

全てが蘇るのに

鳥かごは

空のまま

風が吹き

かこの扉の

鳴く声がした

からっぽの鳥かご

飛び去った鳥が

独りでに 還ってくる

そんな奇跡は信じるくせに

自分で鳥を 捕えに行く

そういう努力はしないのか

いつまで

その鳥かごと向き合っているんだ

空に羽ばたく小鳥たち

「どれもたいしたことはない」

「あの小鳥には 敵いはしない」

手にしたこともないくせに

どうしてそんなことが言えるのか

失われたものはもう 戻らない

でも まだ 窓辺には

空の鳥がこ

扉は開けたまま

帰らぬものの帰りを待ってる

窓からそよぐ

一陣の風

格子をすり抜け

舞い降りる影

日だまりの中

一枚の 青い羽根

最初この「小鳥」(まあ、「青い鳥」なんです)が(は金色のカナリアでした。

不思議なもので、金色のカナリアより「青い鳥」のほうが何か遠く感じ、それで変えてみました。

案外どっちでもいい気がします。笑

村上春樹のお話は短編に限る

村上春樹のお話は短編に限る

その辺が

僕の限界なのだ

彼がすばらしい 作家なのだ

誰かに聞いた

だから多分、そうなんだ

僕は彼のお話を読むと

何か

自分をひっくり返して

その背表紙を

確かめなくてはならない

そんな気がしてくる

それで僕は

歯医者に行かなきゃならないことや

昨日見た夢のこと

好きな女の子を見つけてはならないことなんかを

思い出したりする

だから多分、彼は偉大なんだろう

でも

そのエネルギーは

彼の長いお話だと

僕には少し強すぎて

僕はひどく疲れてしまうのだ

なぜなら

他の人はどうだか知らないが

僕自身の背表紙には

何一つ

機械のためのバーコードすら

書かれていないのだから

村上春樹のお話は短編に限る

僕は本が読みたいのだ

と、言いつつ、村上春樹をそんなに読んでいるわけではないんですが。笑

とにかく、「ねじまき鳥クロニクル」を読み終えた時は、まっさらな背表紙をじっと見つめているような感じになり、ホントに疲れました。

まあ多分、理解できてないからそんなことになるんでしょうけども。

DEAD or ALIVE

青

点滅

赤

エンジン音

横断歩道の上

三步

アナウンス

風

レールの音

白線の向こう

三歩

階段を上る

上る

まだ上る

手すりの向こう

三秒

ただそれだけ

生も死も

同じようなもの

誰かの死んだ場所が

誰かの生きた場所だから

「生きるから 死ぬ」

「死ぬから 生きている」

そんなことを言う

人もいる

天国も

地獄も

信じない

別にここに

未練なんてない

希望とか

救いは

あるだろうけど

抜け駆けしてまでも

救われたくはないから

別に死んだって

構わない

生きることが

苦しいから

「死にたい」

なんて言うて

でも自殺なんてのは

みつともない気がして

いつでも

死に場所を

探してるんだけど

事件も

事故も

そんなに簡単に

起きるものではないから

死んでいった

ヒーロー達に

憧れるんだ

誰かのために

何かのために

自分を捧げて

ケリをつけられるなら

それ以上はない

ただ 犬死にはしたくない

なんて

よく分からない理屈で

今もまだ

死んではいないだけ

死ぬことで

楽になるなら

死んだっていい

でも

生きていく

道があるなら

生きてたっていい

嘘と

本音と

強がりと

それから

ホントの

ただの文字

生きていく

価値があるなら

生きてたっていい

今日は本当は、どうでもいいような、「楽譜のない歌たち」「改善版」をちゃっと掲載するだけの予定でした。

でも今日、NHKのラジオでやっていた尾崎豊の特番をほとんどずっと聞いていて、血を沸きたてられたというか、どうしても何か自分の中の「良い物」を出したくなり、これを公表することにしました。

ただ、彼の歌を聴き、歌詞を噛み締めた時、この詩は僕の中で「空ろ」かつ「無意味」に響いてしまい、今この瞬間も、正直公開を躊躇しています。

と言うのも、先ほど、番組の最後の十五分を聞きながら一気に書き上げた「二十歳」という自信作が、今まさに手元にあるからであって……。

でもしかし、いまだ十九才である僕が、それを公にするにはまだ少し（一ヶ月ほど）早いため、今日はこの作品、ということにしておきます。はい。今日はこれで！

ちょっと喋りすぎましたかね。

まあ、たまにはいいでしょう。笑

「二十歳」は六月三日に公開する予定です。

その日以降に、ぜひ、またいらしてくださいませ。

あ、もちろん、それまでもちよくちよく更新していくつもりです。ですので、それより前でも構いません。笑

では。

田中 遼

「Pray」

“唯一の真実は

祈っても無駄なことさ”

彼はそう言う

“神様なんて信じない”

彼は今

夢を捨て

“まともな”道を

選んだ男

でも 思い出してよ

ずっと昔

ただただ 信じてた

“ 神様はいる ”

そう信じてた

あの頃は

この空も

あの海も

今もずっと

綺麗なものに

見えていた

そうそれだけで

十分だった

そうそれだけで

夢も希望も

神様も

信じられた

“信じちゃダメかな？”

僕の質問

“夢はいつかは叶うって”

僕は今

何よりも

夢追い人に

なりたい男

でも やっぱり不安は

つきないもので

悩んでしまっんだ

“俺の道は これでいいのか？”って

“どこにづく？”って

だけど今

目の前にある道に

光が見えた

導かれてるかのような

一筋の光

それだけで

迷いは消える

そうそれだけで

夢も明日も

神様さえも

信じて行ける

そして今

目をつむり

問い掛ける

世界はどこに向かうのでしょうか？

その中で俺には何が出来ますか？

その答えが見つかったなら

僕は世界を変えられる

そう信じてる

「改善」というか、「添削」というか。

多少削っただけなんですけど、まあ一応載せておきます。

3 1 5 3 6 0 0 0

始まりは五月の風の日

いつものように

戸を開けて

外に出た時

ふっと思ったんだ

僕は何をやってるんだろって

いつまで立ち止まってるんだろって

一年は365日

一日は24時間

一時間は60分

一分は60秒

そんなこと

ずっと昔から知っていたのに

僕はいつも

過ぎてしまった時間につろたえるだけ

どうすればいいか

それも分かっているのに

ためらう一秒が

積み重なって行くんだ

無駄になった時間

取り戻せはしない

僕らに出来るのは

未来を無駄にしないことだけ

一秒が60回

一分が60回

一時間が24回

一日が365回

時が過ぎる速さは

光よりも早いんだ

あっという間に

「未来」も通り過ぎてしまっから

僕らに出来るのは

一つだけ

始まりは五月の風の日

僕は扉を開けて

前に一歩踏み出した

歩きはじめた僕を

風が 吹き抜けた

正直、気に入らない作品なんですが、五月ですし、まあ気楽に掲載してるだけなので、こういうのもたまにはありかと思ひまして。

でも案外、一年が31536000秒だと知らない人も多そうですし、悪くはないですかね？

蟻と月

身の程知らずの

働き蟻が

夜空の月に恋をした

満月でもなく

半月でもなく

細く輝く

三日月に

彼女は彼を見ていない

でも真後ろではなくて

横顔でもなくて

ましてや

真正面から向き合っことは

叶わない

彼はただ通り過ぎる

その姿を

目で追い掛けるだけ

どれだけ背筋を伸ばしても

どれだけ高みによっても

空には届かぬ

一匹の蟻

彼は今

自分に問っている

どつすねば良いのか

どこに行けば良いのか

何を捨てれば良いのか

東で彼女を出迎えるのか

西まで彼女を追い掛けるのか

夢は夢だと 忘れるのか

分かったような振りをして

諦めるのか

翼も

羽根も

プロペラも

アポロも持たない

ただの蟻

誰かに言われるまでもなく

届くはずもない

地球が丸いから

大地の道が

空には通じえないこと

そんなことは知っている

重力の強さも

空の遠さも

「蟻」の小ささも

彼が一番分かっている

でもそんな彼でさえ

自分は止められないから

届くはずもない

見果てぬ夜空を指すんだ

一方月は

自分の寄り添う

青い惑星のどこから

自分を呼ぶ小さな声を

耳にして

少し驚き

興味を持った

でもしかし

もしも彼女が近付けば

声の主はもちろん

青い惑星の

全てのものが

不幸になってしまつから

耳を澄ましながらも

通り過ぎるだけ

今日も明日も明後日も

蟻と月とは近付かず

遠ざかることもない

二人の間がほんの僅かに

揺らめいたとしても

彼女が背を向けて

彼に顔を見せなくても

また次の夜空が

蟻を待っている

身の程知らずの

蟻の恋

叶うはずもないから

終わるはずもない

「働き蟻が夜空の月に恋をした」。

なんとも分かりやすいテーマです。

春の蝉

五月のある夜

やけに明るい

街灯あかりの下で

蝉の叫びを聞いた

「気が早い」とか

笑い事ではなくて

とてつもなく

おかしな話

時々

生きる時を間違えた

人を見て

「冬の蝉」だと

言う人がいる

まったく違う季節で

短い命を燃やし尽くした

美しさをたたえるように

でもしかし

独りで生きて

独りで死んでいく

悲しさを

言葉の裏に潜ませて

どこかさびしげな

「冬の蝉」

悲しいのはどちらか

明らかに時を間違えた

愚かな者と

明らかに世界に騙された

被害者と

世界は

全ての人を

誤魔化せるほどに

狂ってしまった

季節外れの

蝉の声

それは言うまでもなく

警告の叫び

聞こえるか

聞け

理解せよ

世界はここまで来てしまった

春が春でなくなる時

夏が夏でなくなる時

秋が秋でなくなる時

冬が冬でなくなる時

悲劇はもう

すぐそこまで迫っている

目がないなら

耳で聞け

耳がないなら

感じ取れ

立ち向かう

小さな勇気もないのなら

一人で 孤独に逃げてゆけ

ただしかし

逃げたくないなら

たとえ負けても

立っている

この狂った世界に

他の誰でもなく

お前自身が立ち向かえ

春の蝉は

短い寿命を
いのち

燃やし尽くすことも出来ずに

静かになった

帰って来た「春」に

飲み込まれたのか

それとも

ただ 時が来ただけなのか

あるいは孤独が

寂しさが

彼を

殺したのだろうか

勢いで一気に書きなぐったので、自分でもよく分かりません。笑

多分何か、伝えたいことがあるんだと思います。

でも、やっぱり、五月の夜に蝉の音がするのはおかしな話で、背筋が寒くなったような気がしました。

やれやれ。

「天気雨」

晴れた空から 雨粒が

ポツリとくるような突然さ

急にあの娘が

まぶたの裏に現れた

あの頃と 同じような

きらきらした笑顔

胸がざわめく

高鳴る鼓動

ふと思ったただけなのに

「ただの」友達だったのに

急に降り出す天気雨

狐に化かされているような

そんな不思議な

始まりだった

あの娘のことが

気になって

気になって

ちよつとこぼれただけの

思い出の中の

微かな想い

そんなものに

いつの間にやら

飲み込まれてる

急な嵐は 誰のため

雲もないのに

降り続く雨粒達

「忘れる」なんて

簡単だと思っていたのに

すぐに止むって

誰かが言っていたのに

急に降り出す 天気雨

ずっつと続く 天気雨

「天気雨」改訂版です。

かなり無駄を省いた感じですが、サン＝テクジュペリいわく「付け足すものがなくなったからではなく、取り去るものがなくなったから完成なんだ」。

ずっと良くなったと思います。

多分。

魔法の場所

古い

重たい

洋館に

魔法の気配が満ちている

埃が静かに漂う

日だまりの部屋

壁一面に埋め尽くされた

本の数々

その静けさこそが

魔法の証

時とともに

本の重さが増えていく

見た目よりも

感覚よりも

驚く程に

重たい知識

本棚が堪えた時間を

上にのせ

さらに重みが増えていく

無言の重圧に

耐えつづけた時間だけ

魔法が強くなっていく

一方

新しい

安っぽい

高い建物

ひょろっとした頭の方に

やたら綺麗で

やたら明るい

部屋がある

そのの

新しい小さな本棚は

日々の重みに耐え兼ねて

板が曲がってしまっている

魔法のかけらも見当たらない

その場所は

きっと何かを

見落としてしまっている

古い大きな本棚を目にして、棚板が曲がってしまった家の本棚を
思い出し、書きました。

何が言いたいのかさっぱりですが、時を経た本と本棚に何かしら
不思議な雰囲気を感じることを表したなあ、と思っていたようなそ
うでもないような……（・・・；）

最近、ここに書くコメントが一層形骸化してる気がします。笑

二十歳

いつの間にか

僕は

僕にとって

長い時間を積み上げてきた

何故か僕は

このときを

迎えないものだ

信じていた

僕は何かに

命を捧げ

燃え尽きるつもりだったんだ

でもその「何か」が見つからず

「何か」と思ったものに拒まれて

今 まだ湿っぽい

生木のままにいる

幸か不幸か

僕の周りには

潔く 煙になった奴はいないけど

そういつ命も多いから

この年月を

僕は迷い

戸惑い

通り過ぎてきた

どんな人でも

走り続けることは出来なくて

走ったり

立ち止まったり

歩いたり

曲がってみたり

戻ってみたり

また走り出したりしながら

ただひたすらに

一秒を積み重ねていくもの

そう自分に言い聞かせて

僕は自分を慰めている

何を恐れているのか

死ぬことではなくて

生きることが

僕を追い詰めていく

枝にしがみついて枯れていく花を

醜いと思う幼さが

僕を煙にしよつと

向かってくるんだ

立派に立派に

たたずんだまま

中から腐って倒れるよりも

一振りの斧で

地面に倒れ伏す

その潔さを望んだ僕も

二十歳となった

うーむ、作った時は結構良いような気がしたんですが、それでも

ないですね。笑

まあ、なんとというか、酒だけは堂々と飲めるようになったわけ
です。

それ以外は何もないようなもんですから。

絵かきの国

昔々の 昔

おとぎばなしの

その夢の中

絵かきの国がありました

美しいその国で

彼らはいつも

いつでも

描き続けておりました

時に葛藤を

赤く燃やして

時に悲しみを

青に託して

そして喜びを

人の目に

幸福を

人の姿に纏わせて

絵かきの国は

狭く 小さく ひそやかで

誰でも入れるわけではないけれど

彼らの描いた

色とりどりの真実達に

誰もが心を 打たれたのです

しかしそんな中

茶色い戦争が始まって

世界は赤く染まってしまいました

赤

それは 踊り狂って

世界を

国を

街を

人を

あつという間に 飲み込んで

黒に

白に

灰に

全てを委ねてしまつのです

そして始まる モノクロの時代

「真実」を写した

フィルムに合わせ

何故か世界が形を変え

失われていく 色の数々

黄色い喜びよりも

青色の絶望よりも

灰色の勝利

白か黒かに分かれた場所に

絵かきなどは

必要ないのです

いくつかの勝利と

最後の

そして

致命的な敗北

悪夢のような日々の後

瓦礫の中で 人々は

立ち上がって

顔を上げ

少しずつ

少しずつ

前に進んで行ったのです

悪夢を

廃墟を

振り払おうと

ただひたすらに

前へ 前へ

もっと前へ

鉄と

鋼と

アスファルトを積み上げて
生まれた世界

そこは機械のための場所

人は自分が築いたバベルに

押し潰されてしまつて初めて

空が色をなくしていることに

気付いたのです

絵かきの国は今もまだ

世界のどこかに

佇んでいて

ひっそり静かに

絵を生み出し続けているのでしょうか

無駄を全て切り捨てた

この世界には

それを受け入れる場所はなくして

静かに 灰に

変わっていくのです

絵かきの国の絵かきたち

彼らは今 静かに 滅びていくのです

中原中也の詩に「サーカス」という題名のものがありまして、そこに「茶色い戦争」というフレーズがあります。

「その頃が「茶色」なら、今は「灰色」だろう」と思ったところから始まりました。

紙も携帯もパソコンもない場所で言葉をつむいでいた時は、震えるほどいい言葉が浮かんでくるのに、それを思い出してかきとめようとした途端、何か調律がずれてしまいます。

変だなあ

止みかけた雨と傘を持つ人

止みかけた雨

二歩歩くごとに

冷たい何かが顔に当たるけど

頬には水の気配すら

残ってはいないんだ

どうしたら良いかな

くだらないことだけど

傘はさすべきなのかどうなのか

なんだか少しでも

濡れたくない気分で

とりあえず

さしてはみたけど

何か不安で

人の目が気になるんだ

前から

どこかの中学校の生徒が

男女入り交じって

歩いてきた

笑いながら

はしゃぎながら

彼らはすれ違っていく

誰ひとり

傘はさしてなくて

彼らが通り過ぎた後で

僕は

空を確かめ

傘をたたむ

(なんだ 止んでるじゃん)

そして

額に落ちてきた雨粒には

気付かないふりをする

しばらく歩いていると

やはり前から

紛れも無い老人が

重たい

ぎこちない足取りで

ゆっくり歩いてくる

彼の手の中のビニール傘は

その翼を広げて

ないよついで

あるよつな

雨粒を

じっくり受け止めている

彼が通り過ぎた後

僕はやはり空を確かめ

傘を開いた

（やっぱりいるのかな）

決めかねているのは

空も一緒に

とじあえずの雨の気配

雨も降っていないのに

傘をさすのは

ひどく間拔けで

でもなんだか

どうしても濡れたくなくて

雨宿りが出来ればいいけど

そんな時間はなくて

水溜まりをよけて歩いていく

つまらない男

僕はせめて

それを跳び越えていくくらいの

無邪気さは

持っていたかったのに

僕が傘を広げて

すぐ

雨が強くなった気がした

ついてるのか

そうでもないのか

でも僕は

何か

負けたような気がした

意味はあるようで、ありません。笑

このまんまです。

ある朝

今朝乗った電車の中

向かいに立った女性が

とても綺麗で

可愛くて

ちょっとびっくりしてしまっただ

名前も知らない美しい人

もともと惚れっぽい性質で

「じいじいとはよくあつて

その度に思うんだ

あの人は僕にとってどのくらい

遠い人なんだろう

もしかして

友達の友達ぐらいの場所に

いてくれたりして

それでも結局届きはしないけど

何か近づけそうな気がしてくるだろ

窓の向こう

扉の向こう

隣の手すりで

何が起きようと

僕には関係のないことで

目に入らない振りをする

どろどろっていうんだ

「僕には関係ない」

僕の知り合いの知り合いの知り合い

そのくらいまでいけば

僕は世界とつながれるかな

それとももう少し

輪を広げなきゃならないのかな

ともかくも

たどってたどってたどった先で

誰もがつながっているって

知ってはいるけど

他人は他人で

僕は素知らぬ振りをする

電車的那个人は

僕なんかには

見向きもせずに

僕が降りたことのない

乗り換えのない

小さな駅で

降りていった

当然さ

友達の知り合いの顔見知りであろう僕は

彼女とは何の関係もない

フツーでどこかパツとしない

一人の男なんだから

扉が閉まった瞬間

僕はもう

彼女の顔も思い出せない

恋だけど

恋ではなくて

知らない女性^{ひと}だけど

他人ではない気もする

そんなある朝の

短いお話

実話のようなそうでもないような。

時々、夢で見たんだかホントにあったんだか分からなくなります。

まあ多分、現実を美化して夢みたいに仕立ててるだけでしょうが。

優先席

色んな人が

色んな想いと共に

腰を下ろしてる

電車の端の席

その目の前に立った時

でかでかと書かれた

「携帯OFF」のマークが

目に入り 僕は

とつさに携帯をしまう

まことしやかに囁かれる

「無意味」の声に

電源までは切らないけれど

ポケットに収めるだけで

誰かが気分を良くするなら

その位はしてもいいかな

その想いを

知るはずもなく

その席を取り囲む

携帯の広告

また新しい商品が出るらしい

この座席のマークは

長いこと

変わっていないのに

最近聞いたけど

やっぱり携帯の電波は

身体に良くないものらしい

ヒステリックに騒いでる人もいた

けど同じ人が

澄ました顔で

煙を吐き出しているんだ

何かなんだか

生きてること自体が身体に悪いって

笑い話

全てのことに

「可能性」があつて

良くも悪くも

何が起こるか分からない

だからこそ

くだらない

意味のない

小さなルールも

守ってみようか

せめて

そうする振りだけは

続けていこうか

僕は携帯を取り出して

電源を切る振りをして

マナーモードに切り替える

誰かに褒められたいわけでもないから

それでいいんだ

マナーを守る理由。

それは自分以外の誰かの世界を整えるためであって、自分の得となることなど何もありません。

ただ、誰かのために。

この広い世界で

宇宙では

原子と原子が出くわすことも

一つの奇跡だと聞いた

宇宙はそれほどまでに大きく

世界はそれほどまでに広い

点と点がぶつかる瞬間

線と線とが重なる空間

ただそれが欲しかっただけ

君を抱きしめるのが

僕でなくても構わない

君が幸せであるならば

それで良い

君と燃えるような恋をしたいわけではない

遠くから 君の幸せを祈るだけで良い

そんな綺麗事を僕は

本気にしようとしていたんだ

胸が苦しい

心が痛い

ただ想っただけなのに

君を好きになってしまった

ただそれだけのことなのに

惑星の上では

無数の原子の粒が浮かんでいて

出会っては離れを繰り返しているけど

一度出会った二つが

再び寄り添うことは

やっぱり奇跡なんだと知る

世界が広すぎるのが

悪いわけではなく

僕らが小さすぎるのが

いけないわけでもない

そんな気休めで僕は

自分をごまかす気でいたんだ

君を幸せにしたいのに

ホントにそう願っているのに

誰かが君を包み込むことを思うと

心の血管で

砕けたガラスが

暴れ出すんだ

何故僕は

君を好きになってしまったんだろう

それが間違いだったなんて

言いたくはないけれど

何故僕は

君と出会ってしまったんだろう

痛みしかありえないなら

どうして 君と

何故僕は

君を愛してしまったんだろう

始めから届くはずもないのに

君が幸せであれと願う気持ちに

嘘はないけれど

嘘はないんだけれど

なにやら難しいことばかりです

足りないのは力なのか、想いなのか。

やれやれ、といったところでしょうか。笑

道

誰でもない

自分の道を

歩きたくて

ひたすらに

がむしゃらに

進むつもりで

茂みの中に

足を踏み入れた

道を作るつもりで

草木を踏み締めて

歩いて歩いて歩いてきた

誰にも会わず

誰とも話さず

一人で 孤独に

気付けば僕は

どこを目指していたのか

それすら忘れてしまっていた

誰かいないか

どこかにいないか

望んだはずの

一人が 孤独が

苦しくて

「道」を探すためのだけの 旅

苦しい苦しい

目的^{ゴール}地のない旅

見つけた誰かの足跡

僕は急に安堵して

餌に飛びつくように

その後を辿り始める

足跡の主は

あっちへ行ったり こっちを行ったり

ふらりふらりと

迷いながら進んでいく

足取りを追うだけで

彼の気持ちができる気がしてくる

淋しいんだろ

不安なんだろ

今追い付く

今手を貸すよ

だから もう大丈夫

きっと僕と同じなんだな

追いかけても

追いかけても

彼の影すら見えなくて

急に不安になってきて

もつずっとこの道を

歩いて来たのか

こんな寂しい 虚ろな道を

お前は 平気なのか

どう見ても

お前は一人で

道に迷ってるのに

なんでまだ進んでいくんだ

足元ばかり

ずっと気にして歩いてきた

お前の足跡に

この足を重ね重ねて

歩んできた

同じ歩幅だな

不思議なほど

お前とは気が合う気がする

今行くぞ

待ってるよ

理解は唐突に

遠慮もせずに訪れる

見たことのある景色

嫌な「雰囲気」

足跡まで同じサイズ

なんてことのない事実

「お前」に言ったはずの

宙ぶらりんの言葉

言われてみるとイラッとしたりして

結局のところ

みんな一人なんだなんて気休めを

本気で口にしてみたりして

そういえば

探してた「道」はここで良いのか

それだって分からなくて

とりあえずは空の下

何かを探して

どこかを目指したくて

今日も明日も

迷って迷って歩いていくんだ

この詩とはあんまり関係がないんですが（いや、なくもないか）、最近よくこの台詞を思い出します。

「男はタフでないと生きて行けない。優しくなければ生きていく価値がない」。

ハードボイルドを目指したってろくな事にはならないけれど、多
少はカッコつけた方が良い。

そんなわけで、この台詞が頭の片隅に置いてあるのです。

ブラックホール

内側が

暗く 暗く

闇に染まっていく度に

誰かに笑いかけてる僕がいて

笑顔の仮面の裏側に

僕は無限の闇を見つけた

いつか

お前の作り笑いを笑ったけれど

多分

僕も今

同じ顔を作っているんだ

笑えてないこともない

楽しいことがないわけでもない

心に光が射す

そんな時もある

ただ

ホントの真ん中に

冷たい闇が浮かんでいるんだ

光と温もりを

静かに奪う

ブラックホール

誰の心も届かない

心の中の特異点

お前もこんな

深い闇を

胸に抱えて

生きているのか

僕に出来ることなど

何一つ

何一つ ないけれど

星すら飲み込む

その間に

一体誰が勝てるのか

でも 多分 光を

微かな

微かな

光でも

注ぐことをやめたなら

僕は飲み込まれてしまうから

せめてもと

笑ってみせる

雑踏の中に一人

「闇には誰も勝ち得ない」。

そんな台詞が何処かにありました。

幾万の太陽をもってしても、幾億の銀河をもってしても、宇宙の闇を消すことは出来ない。

それらはむしろ闇を濃くするだけだと。

ただ、中心に蠟燭の明かりが一つ灯れば、闇を払うことができる。

それだけの事です。

カッター

少しだけ軽率に

破滅へと落ちて行った人を見て

自業自得と笑った人がある

僕は驚いたけど

きっと正しいと信じて

そんなことを言ったんだろうな

正義なんてカッターみたいなもんさ

そんなので何かを守れはしないけど

傷つけるには十分過ぎるんだ

百円で買える

薄っぺらい刃を武器にして

誰もが

強いつもりになっているだけ

別に彼らを質すつもりもない

たとえその刃が折れたとして

どうぞせすぐさま

新しい刃が現れるのさ

それに僕だって

おんなじような安物を

振りかざしてるだけなんだ

でもそんなもので

何かを貫けるはずもなく

何かを倒せるはずもない

そいつを振り回して

英雄にでもなったつもりなのか

誇らしげに

空に掲げた

そのなまぐらが

心を突き刺し

人を追い詰めるのも

知らないで

取り出すのも

手に入れるのも

たやすいのなら

収めることも

出来るんじゃないのか

誰もが持つてるその武器が

誰かの心を傷つけるなら

僕はそれを

ポケットにしまいたい

それが正しいことかどうかは

別にして

とあるニュースがやけに気になって、詳細を調べようとしていた途中でぶつかった「自業自得」という言葉。

それが何故か喉に引っかかりました。

その言葉を発したのが一人だけではなかったこともその原因の一つなんだと思います。

何故人は、実際には知りもしないことで誰かを傷つけることを簡単に口にできるんでしょう。

きっと正義の味方にもなってるつもりなんだろうな……。

ちゃっちい武器を振りかざして。

一人

一つの夢が

終わった日

傷の痛みに泣いた二人

悲劇は悲劇なのだけど

どこにもある

ありふれた物語

君がいなければ生きてゆけない

本気でそう思った

僕がいなければ生きてゆけない

君だってそう言った

誰もがそんなことを口にして

忘れていくのも

知らないで

言つまでもなく

君も僕も

誰だつて

一人で生きているのに

不幸なのが

自分だけに思えたり

悪いのが

君だけに思えたり

思えば

そんな僕だから

君も離れて行った

ただそれだけのこと

何を思っていようと

何を口にしようとも

事実だけが重なっていく

二人の終わりは

世界の終わりではなくて

僕だって死んじやいないんだ

ありふれた

でも

軽くもない物語

ありきたりな結末に

泣いてもみた二人

君を本気で好きだった

嘘でも幻でもない想い

季節が過ぎていくように

夢が覚めてしまうように

全て消えてしまった

だけのこと

夢の終わりは一人

生きていても一人

「一人で生きられるほど強くない」とは言いつつ、自分でケリを付けられるほど思い切りがいいわけでもなく。

そして結局一人。

ただそばにいたくて

昔々の物語

世界が大きくて

行けるところも少なくて

五百円でも大金で

電話というのは

家にあるもんだった頃

僕は君を好きになった

嘘をつけるほど

賢くはなく

正直になれるほど

馬鹿にもなれず

隣の席が

一番近くで

気持ちだけが

そばにいた

ただそばにいたくて

それだけで

君を幸せに出来ると信じて

何も持たずに

全てを手にした気でいた

時は過ぎ

何もかもが

変わっていくけど

何故だか

変わってくれないものもある

僕が僕でいる間に

君は随分と離れてしまった

まじまじとまじまじと遠く

手も

心も

声すらも

届かないほどに

なにもない日々が過ぎてゆく度

なにもない僕が壊されていく

自信だってあった

妙に信じてもいた

この手を

この世界を

自分自身を

ただそばに
いるだけで

君を幸せに
出来ると

昔々の物語

世界が大きくて

行けるところも
少なくなくて

五百円でも大金で

電話というのは

家にあるもんだった頃

未来は輝かで

僕は無敵で

特別で

僕自身だった頃

僕は君を好きになった

最近暗い作品が多い気がします。

現在地が表れているようです。

次回辺り、空元気の明るいもんを出してみましようかね。

君にあげたいもの

今日という日を

向かえたことに

とりあえずは

「
ありがとう」

たくさんの

いざいざや涙を

乗り越えて

幾度もの

「危機」と分岐を

行き過ぎて

僕達は

一緒に 歩いていくことを

決めたんだ

あの時僕は

指輪でも

バッグでも

どんなプレゼントでもなく

ただこの気持ち

ありつたけの心

君に捧げようと誓った

永遠を祈って

幸福を願って

君の手を握ったけれど

僕に出来るのはそれだけで

急に不安になってきてしまったんだ

僕達は幸せになれるかな

いや むしろ

僕は君を幸せに出来るのかな

急に重たいものを

背負った気がして

肩に手をあててみた

やたらお堅い舞台衣装は

僕にはちょっときつかった

誰もが幸せになろうとして

でもなれなくて

苦しそつに

道を渡っていくんだろ

ふと気が付けば

隣の君の

輝くよつな

悪戯っぽい笑顔

こんな口ぐさ

難しく考えなくて良いのだから

そんなに顔に出たのかどうかはおいておいて

そつだね

君の言いつ通り

僕が君に

ホントにあげたいものは

たった一つなんだよ

指輪でも

バッグでもなく

ときめきや

感動でもなく

温もりや

安心でもなく

もちろん夢や

理想なんてものでもなく

ちゃんとお腹にたまって

それでいて

心にも響くものを

言葉だけではなく

言葉なしでもなく

ただ幸せを

ありつただけの幸せを

隣の君に

もちろん

いろんなものや言葉が

気持ち

僕達の間を

行き来するだろうけど

他の全てよりも

ただ幸せを

ありつたけの幸せを

ほかならぬ君に

こんな「今日」が迎えられるのかどうかはともかく、もし、そう
なった時には、こつこつ心持ちでいたい。

そつこつ感じで作りました。

なんとなく「ただそばにいたくて」と対になる気がします。

寒い日

寒い という

手に息を吐く

まだ 寒い という

手が冷たい

芯が冷たい

僕の手は死んでしまったのか

心臓の辺りは こんなに

こんなに燃えているのに

寒い

何故だ

本当に

寒い

頑張れ という

頑張れ と にぎりしめる

ぎゅっと にぎめる

ぎゅっと にぎめる

じわりと温もりが染みてくる

じわり

じわじわ

じわり

じわじわ

ゆっくり ゆっくり

広がっていく

うってかわって

指の先まで

濃い温もりが染みてくる

誰かにわけてあげられるほど

わけてあげたくなるほどに

また 頑張れ という

ぎゅっと にぎめる

ぎゅっと にぎめる

頑張れ

頑張り

気づけば一ヶ月以上空いてしまっていました。

作品を作ってなかったわけでもないんですが、まあなんとなく気が乗らずに。笑

今日は寒かったなあ。

名も知らぬ、美しい子供たち

白、である。

大地にある全てが薄くおしろいをして、おしとやかにたたずんでいる。

私達の目の前にある少年　　もしくは少女は、一人きりで立っている。

そして息を殺し、その場所に溶け込もうとしていた。

私達はその姿を心に焼き付けようと試みる。

彼らが優しく柔らかな絵本の世界から、そつと抜け出てきた天使のように美しいからだ。

しかし私達の記憶は、何かに覆われるようにして見えなくなってしまう。

雪は全ての音を飲み込み、降り積もっていく。

私達と彼らの間でも、雪片をまぶした空間が地面にたぐり寄せられ、静かに消えていく。

私達は彼の存在を、彼女の姿を、何処かに残したい、留めておきたいと思う。

しかし、それは出来ない。

私達は彼の背丈を知っているし、彼女の顔も見た。

着ているものも体つきも、確かに目にはしている。

しかし、それを何か形にしようとする度に、彼らの輪郭は私達の言葉をすり抜けてしまうのだ。

まるで掌の上の雪が融けていくように。

かろうじて私達の手の中に留まってくれるのは、彼らの瞳だけである。

彼らは食い入るように遠くを見つめている。

少年はまつ毛に凍りつく雪を払おうともせず、少女は顔をかすめるようにして降る雪片に見向きもしない。

彼らは瞬きもせず、幾万の雪の向こうから届く微かな光、山々と空との境を只見ている。

その瞳はどんな青空よりも澄み渡り、どんな漆でもかなわないほど黒々と輝いている。

彼らは私達が恐ろしく思うほど、美しい。

私達は畏怖の念を抱きながらも、彼らに触れたいと思う。

少年の服についている冷たい雪を払ってやり、冷え切っているはずの少女の手を温めてやりたい。

そう思うのだ。

私達は一步彼らに近づいた。

ギシツといづきしむような音が、足の裏から伝わってくる

声を出すことは出来ない。

私達の声は雪に奪われたままだ。

彼らはこちらを見ようともしない。

当然ではある。

私達はもとより、少年の視界に、少女の世界に、入ることすら出来ない。

私達は彼らの横顔を見据えながら、さらにもう一步踏み出した。

彼らは動かない。

さらにもう一步。

大丈夫。彼らは逃げたりしない。

一歩、

二歩、

三歩。

ミシッ、

ミシッ、

ギシッ。

その時、ずっと遠くから地響きのような音がした。

普通であれば自分の吐息にかき消されてしまうような、微かな微かな音だった。

だがしかし、この限りなく無音に近い静寂の中で、その音は銃声

のように響く。

私達は反射的に顔を上げた。音は最初の一度だけだ。

しかし、私達は筋肉を硬直させたまま、じっと遠くを見ている。

本当は気付いている。

先程の音は、何処かの屋根から雪が落ちただけのこと。

何の意味もない、ありふれたものなのだ。

しかしそれでも、私達は目を凝らし、神経をとがらせ、地平線があるはずの白い大地のその向こうをじっと見つめている。

そこでもここでも、空から舞い降りた雪片が音もなく地面に吸い

込まれていた。

全てが同じ速さで、真っ直ぐ大地を目指して。

決して追い抜くことはせず、ぶつかることもしない。

とはいえ、彼らは「同じ」ではない。

私達ははたと気づき、少年を、少女を振り返る。

しかし、目で見る前に分かっていた。

何故かは分からない。

少年は何の躊躇いもなく、少女は何の痕跡も残さずに消えてしまった。

私達は目を見開き、目の前にある虚空を見つめている。

少年がいたはずの場所、少女が立っていたはずの空間を、雪が生真面目な顔で埋め尽くしていく。

何事もなかったかのように。

無限とも思える繰り返し。

雪はまた、全てを包み込んでいく。

しかし、少年は、少女は、もう戻ってはこない。

そこはただ、白である。

嘘かホントか、今日我が家から雪が観測されたらしく、それでの、雪をテーマにした詩だか小説だか分からない作品を公開することにしました。

執筆した当時、ル・クレジオの「地上の見知らぬ少年」を読んだばかりで、自分でもはっきり分かるほどに影響されていたことを覚えています。

ちなみに、このお話の登場人物は二人だけです。

「私たち」と「少年、もしくは少女」。

ああ、いったい何が書きたかったんだろう。笑

WADI No.17

実は今日 君のことを聞かれたんだ

僕らの記憶の隅に

いるようないないような

そんな男に

話してるうちに彼は

君を迎えに来たという

僕は耳を疑った

愛しい君を 迎えに来るなら

彼は完璧じゃなきゃならなかった

僕を納得させるため

君を幸せにするために

せめて僕が敵わない何かを

持っているべきだった

だけど僕は あいつなんか

大事な君は渡せない

でも腑に落ちなくて

もう少し話を聞いてみると

彼は君に10年近く会ってないって

訳が分からないことに彼は

唐突に君を迎えにきたらしい

僕は耳を疑った

愛しい君よ 君はこんな人にも

優しかったのか

何故か今日

君の受難が分かった気がした

だから多分君はここを離れていったんだ

だけど僕は どうしても

大事な君を諦められない

愛しい君よ 戻ってこないか

今ならきつと

僕が守ってあげられる

大事な君よ 帰って来ないか

君を奴には渡せない

愛しい 大事な 唯一の君よ

僕にチャンスをくれないか

愛しい君よ 帰って来ないか

大事な君よ 僕を試してくれないか

愛しい君よ

大事な君よ

どうか もう一度 もう一度だけ

僕にチャンスをくれないか

きつと きつと

守ってあげる

だから 愛しい君よ

もう一度

僕を試してくれないか

腹の立つことがあります、まあ一気に書き上げたわけですよ。

届くかどうかは自分の手にかかっているわけではなく、待つことしかできません。

歯がゆくもあり、情けなくもあり。

祈ることぐらいは許されるでしょうかね。

A m a n t e s , a m e n t e s

ずっと考えていた

「恋は病だ」って言葉について

多分きつとどこかで

それは正しく響くのだけど

僕は少し違うと思う

「病」だと言つのなら

この想いもいつか

「治って」「しまつのか

ずっとずっと想ってきた

君を ただ君のことを

でも叫びもしないで

身を焦がす程でもなくて

とはいえ冷たいと言えば

そうでもなくて

握った手の温もりが ちょうど

想いの温度だった

ただ36度の心と身体で

君を愛していく

終わらない 変わらない

ただ一つの温もり

熱いと のぼせてしまっただろ

寒いと こごえてしまっただろ

炎は 燃え尽きてしまっただろ

さよならは 悲しすぎるだろ

ただ36度の心と身体

特別じゃない

いつも通りの温もりで

長く 長く もっと長く

命の限り

未来がある限り

世界が続く限り

君を ただ君のことを

愛していくんだ

36度の想いを胸に

君を ただ君のことを

見つめていくんだよ

なぜか今日は気分が乗ったので続けて更新です。

何か、ぱっと燃え上がって、ずっと消えてしまっ。

そんな恋愛だったら、諦めるのも成し遂げるのも簡単なんだろうな、と思います。

題は「恋するものに正気なし」という意味のラテン語。

まあ狂ったもん勝ちのような気もしますがね。

無題

時々 空を駆け登って行きたくて

空を見上げて 立ち止まってみるんだ

それはたいてい 鉛の雲が 空を覆っている日にやって来て
僕を当惑させるんだ

空がやけに近くに見えるから

跳び上がれば 届きそうに思うから

僕はここにいらなくてもいいんじゃないかと

そう思うんだ

ここに居るのは僕じゃなくてもいい

僕以外の誰かなら きっと もっと うまく

生きていく

空を翔けていく この空を翔けていく

雲の向こうへ 光の故郷へ

ここに居る僕を 消してしまおう

空へ 空へ 空へ

ここにある僕の影を 取り去ってしまおう

そこが風の通り道になるように

僕が鉛を突き破って 飛び上がる日に

きつとそこから 青空が見えるんだ

書初め、というか、今年の初めに愛用のペンを取り、最初に何か文章を書こうとしたとき、自分の作品の在庫から見つけたものです。

新年早々暗いもので申し訳ないような気もしますが、まあ、気分はこんなんでした。

関係あるようなないような、去年あった皆既月食を見ていたとき、「ああ、自分の影も月に届いてるんだ」みたいな事を考え、「僕の影」を使った詩を作ってみたくなった、というきっかけで作り始めたんだっただかな？

ちなみに題名は「空を翔る」だの、「風の通り道」だの考えたのですが、「無題」というのが一番しっくり来ましたので、こうになりました。

あしからず。笑

結果はともかく、探してる答えの切れ端ぐらいは、この年中に見つけたいなあ。

まあ、良くも悪くもこんな感じですが、どうぞこれからも「僕自身」として「をよろしくお願いします。」

田中 遼

財布だけを持って

たまには静かに
一人で電車に乗ってみる

聞き慣れた音楽も
読み飽きた小説も

家の隅っこにおいてきて

街のただ中で一人

負けないなんて幻想は
いつしか僕の首に巻き付いていた

落ちるにしても
逃げるにしても

上っていく時だって

そいつが僕を
邪魔するんだよ

自分の心の隅っこの
小さな小さなかすり傷

別にもう

痛くもないけれど

別にホントに

痛くもないけれど

傷が開いちゃ困るから

なるべく触れないようにしてるんだ

一人で生きるなんて

自惚れは

一人の夢に砕けていった

この世界の隅っこの
君と出会ってからは

この心の真ん中に

いつでも君の場所が出来ていて

すべてのことが

虚ろに響いてしまうんだ

この街のどこか隅っこに
何かカケラを
落としたからって

それは負けた理由にならないね

夢だって恋だって
僕はちゃんと持っていて

何一つなくしちゃいないんだ

ただ

諦めるってそれだけが

僕のなくした「何か」

一人きりで乗ったから
一人きりで降りていく

ただそれだけなのに

ただそれだけのことなのに

最近の発見。

同じような文章を繰り返すと、非常に嘘くさく聞かせること。

自分の身を滅ぼすのはおそらく酒であること。

多分何があっても諦めきれないんだろうな、ということ。

以上。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2813r/>

僕自身として

2012年1月14日00時48分発行